

日待講からみたムラの生活と社会構造

——トカラ列島調査研究ノート (1)——

鳥越 皓之

一 はじめに

近隣の人びとがある特定の日に集まり、お籠りをするのを日待という。この日待を契機として組織化される信仰的な集団をさして日待講とよんでいる。

全国的にみて、日待を行なう日はほぼ決まっている。それは十干十二支の組合わせによって生じる六〇種の日のうち、庚申・甲子・巳の日であったり、また旧の正月・五月・九月の中旬であったりする。さらにたんに農事の閑な日を選ぶ場合もなくはない。庚申の日や甲子の日、巳の日に行なわれる行事はとくに庚申講、甲子待講、巳待講とよばれるのが普通である。

日待は現在それを行なっている人たちには夜を徹して日の出を待ち、翌朝、日の出を拝し祈る行事のように理解されている。これは「日待」の「待」が日を「待つ」という意味に解されたためらしい。日待のマチはマツリ（祭）と同じ起源の言葉で、ともに「傍に居る」という意味⁽¹⁾という。つまり神の傍にいと解すべきで、日待という行事

も一種の祭りであるわけである。

この祭りである日待の行事を通じて、ムラの生活と社会構造を理解しようとするのが本稿のねらいである。実態としてのムラの生活や社会構造はさまざまな断面で切って理解することが可能である。ここでは、日待という行事をムラの生活や構造が集中的に、そしてある意味では比喩的にあらわれる一つの断面と想定したのである。

現在、各地の農山漁村を歩くと、都市化や青年層の激減のために、さまざまな集団や行事が消滅したり、その跡を止めるだけになっている場合が多い。そのような中で、不思議にも日待講だけが生彩をはなっている場合があまりにもしばしばある。それは何故であろうか。

それは日待講がたんに信仰的な寄り合いであるにとどまらず、政治・行政的あるいは親睦的な寄り合いになっているからであろう。事実、ムラによつては、信仰的な行事はしるしばかりにするだけで、あとはムラ人にたいするさまざまな伝達や、また酒宴をもうけての親睦の場となっているところがある。つまり、年に一度、あるいは二、三度のムラ人全員のムラ寄り合いなのである。

日待講がムラ人全員が顔を合わす一種のムラ寄り合いであるために、そこにおのずと、ムラの生活、構造が反映されるのである。これが日待講を対象として選んだ理由である。

注(1) 桜井徳太郎『講集団成立過程の研究』吉川弘文館、一九六二、二三八―二四三頁参照。

二 悪石島の概況

調査対象地のおおよその輪郭を紹介しておく必要がある。調査対象地は鹿児島県大島郡十島村悪石島である。

この島は屋久島と奄美大島の間にある。

屋久島と奄美大島との間を結んでいくつかの島が列なっており、それは俗にトカラ列島とよばれている。悪石島はこのトカラ列島のうちの一つの島である。無人島を除くトカラ列島の島々を九州本土に近い側、すなわち屋久島側から順に述べると、口之島・中之島・諏訪之瀬島・平島・悪石島・小宝島・宝島となる。この七つの島を合わせて十島村という一つの行政村をつくっている。宝島の南西方向に奄美大島が位置する。この島の順序が示すように、悪石島はトカラ列島の中央部やや奄美よりにある。

悪石島に限らず、トカラ列島の島々は半農半漁で生活をたてているのが原則であった。もっとも島によって、農業および漁業への比重の置きかたが異なる。たとえば、どちらかというと宝島は農業を主とし漁業を従としている。それにたいし、悪石島では漁業を主とし、農業を従としている。

農業は戦前までは主として焼畑による粟栽培であった。戦後になると焼畑耕作はかなり衰え、かわって常畑によるサツマイモ・陸稻・水稻・粟などの栽培が主になってきた。漁業ではカツオ・サワラ・トビウオなどがとれている。現在は農業や漁業は廃れる傾向にある。それにかわり離島振興法にもとづく道路工事などの日傭従事が多くなっている。また村役場は牧畜に期待をもっている。

昭和五〇年現在、悪石島の世帯数は三三。人口は男五〇名、女四八名の計九八名である。ただし小中学校の先生の世帯が一〇世帯あり、地付きの島民の世帯は二三世帯にすぎない。

このトカラ列島に最初に学問上の関心をよせたのは民俗学者である。そして現在も民俗学・人類学に深い関心をもたれている地域である。なぜ民俗・人類学者に深い関心をもたれたかというと、これらの島々が国への南方

文化の流入径路となつたであろうと想定されたからである。黒潮にのつて、わが国へ人びとや文化が流入したとするなら、その場合、これらの島々は流入径路の一里塚になつたはずであり、そこにおのづからその時点の文化を知ることが残存しているだろうと推測したのである。

昭和二十七年に柳田国男が『海上の道』を著わした。この書で柳田はヤシの実が南方から流れ来る事実に着目して、わが国の稲作の流入径路としての海の道を想定した。この著はさらにこの地域への調査熱を高めたといえる。その結果として、この地域の基層文化はかなりの程度あきらかになつた。⁽¹⁾

本稿での関心は基層文化の究明を第一義的においていない。前節でふれたごとく、ムラの社会生活と構造を理解することにある。けれども、ふれられるかぎり、基層文化の究明に役立つ資料をあわせて紹介しておこうと考えている。

注(1) いくつかのすぐれた文献があげられるが、代表的なものとしてつぎのようなものがある。早川孝太郎「悪石島正月行事聞書」〔民族学研究〕一九三六、桜田勝徳「宝島の親方取り」〔民間伝承〕一九四三、伊藤幹治「宝島の社会と宗教の構造的理解」〔国学院大学日本文化研究所紀要〕一九六二、下野敏見「吐噶喇列島民俗誌」〔私家本、一九六六〕、安田宗生「トカラ・悪石島の葬送儀礼」〔日本民俗学〕一九七二、国分直一「日本民族文化の研究」〔慶友社、一九七〇〕。

三 悪石島の日待行事

この節では日待行事の準備から翌日早朝の行事終了までの経過をつぶさに記述することに専念する。日待行事の変化やその意味、および記述にもとづく説明は次節以降で述べることにする。

悪石島では日待は年に一度、定まった日に行なっている。旧暦の一月六日である。この島では現在は新暦による

生活であるが、祭祀行事のかんりの部分は旧暦で行なわれている。

六日の朝八時ごろから日待の準備をはじめ。まず日待に必要な食料品などを手に入れることからじまる。この島では一五才から五九才の男女をユーブニン（有夫人）とよぶ。他の島々の例から推測すれば、もともとは男性だけがユーブニンとよばれたはずである。ユーブニンとは一人前の労働をする人の称である。このユーブニンのうち、二五才以下の若い人がガチ（文献資料によると「月役司」）に選ばれる。ガチは五、六人であったという。人数は明確には決まっていないうである。このガチが中心になつて日待の準備をする。つまり、ガチが朝八時すぎから各戸をまわつて食料品などの供出を受けるのである。

供出物の内容は例年変わりがないのが原則である。けれども、やはり時代とともにかなりの変化をきたしている。変化の内容は後に述べることにして、残存している一番古い文献資料である昭和二八年の供出物をみてみよう。

「村中御祈願之為各戸より家毎に諸品取集記載簿」によるとつぎのごとくである。

島民の各一人ずつに対して、粟一合、米五勺⁽¹⁾ずつ。甘藷は各戸から取り集めているが量はとくに決められていない。また各戸から、薪木⁽¹⁾一〇本、竹一五本、大根一本、里芋五個、豆腐一きれを出すように定められている。さらに木耳、コンブ、ソーメンの三種のうち、各戸から出せるものどれでも。これは量は決まっていないう。また「肴切れ少々でも」という記載がある。それ以外に焼酎を各戸ごとに一杯ずつとユーブニンごとに一杯ずつとっている。つまりユーブニンが三人いる家族だと四杯とられることになる。一杯は三合三勺である。

現在ほどでもないが、金銭による購入物品がある。肴六百匁、一八〇円、石油一升、六五円。醬油五合、四〇円。鰯節一本。茶二〇匁。大豆二升、二八〇円。さらに昔はこれらの購入物も各戸から取り集めたり、寄附にたよつた

という。

これらの物品は総代の宅に集める。総代の宅で日待行事を行うからである。「総代」はムラの政治的代表者である。幕藩時代のトンジュウ（島司）にあたるとムラ人はいっている。村役場との行政的な連絡は総代とは別役である。「連絡員」がいる。また行政村との関連では村会議員が重要な役割をになっている。これら二つの役職と比べると総代はムラ人によるいわばプライベートな役職といえるかもしれない。村行政からみればプライベートであるが、ムラ人を取りしきるのは総代であり、ムラ人の共同生活のためには不可欠な役職である。プライベートな役職とはいえ、ムラ内でのやや込み入った問題の処理には総代に依存せざるを得ず、ために村役場も各島・各ムラの総代の名前を常時把握している。総代はかつてはゼンジャクとよばれる字のところに役職畑をもっていた。総代は一年任期で交代する。

夕刻までかかる準備作業の途中の作業従事者の昼食は総代宅で食べることになっている。食事内容は簡単なものであるが、これはもちろん総代の個人負担ではない。取り集められつつある食料品を使用する。

夕刻ちかいところにガチが総代宅から神役宅にでむき、日待講への招待の言葉を述べる。日待講は総代宅で行なわれるのである。それから暗くなるまえころに、四人の「神役」たちに総代宅のフロに入る準備ができたことをガチが触れてまわる。つい最近まで水道がなかったので、水は遠くの泉から汲んでこなければならなかった。水を汲んでくる作業もすでにガチたちが昼間にしていたのである。知らせを受けて神役たちは順番に総代宅でフロをいただく。フロに入った後、もう一度神役たちは自宅にもどる。

水を手に入れることが不便なつい最近までは、炊事などのために各戸で必要な水の補給は主婦の過重な労働の一

つであつた。ために、いきおいムラ人のだれしもフロに入る機会が少なくなり、フロはたいへん貴重なものであつた。フロを沸かせば、家族員が入るだけではなく、もらいフロをするのがあたりまえであつた。このような事実があつたために、地元の人たちは神役が総代宅のフロに入るのをたんなるもらいフロと現在では考えている。

しかし実際はこれはたんなるもらいフロではない。全国のいたるところで、日待に出席する者は出席前に必ずフロに入らねばならないと決めている風習にいきあたる。それらの風習が示すところでは潔斎の意味あいがある。この事実から推して、神役がフロに入るのは日待の潔斎とみなすべきで、すでに日待の行事は始まっているともいえる。

この島では男の神役が五人、女の神役が二人、あわせて七人いる。男の神役がホンボーイ（本奉位）・総代・ダイクジ・ハモノヤク・セイクジである。ホンボーイからセイクジに至るこの順番が、座席を占める場合などの上位からの順番である。フロもホンボーイから入る。総代も神役の一人に数えられている。男の神役は一年交代である。

女の神役はネーシ（巫女）とよばれる。ムラノネーシとハモノネーシの二人である。役をもったネーシはこの二人であるが無役のネーシも多くいた。祭のときなどに、神がのりうつて体が震えた経験をもつ女はすべてネーシとなつた。多いときには島の女の半分がネーシであつたという。このネーシは日待にはよばれない。他の祭事にはたいへん重要な役割をはたすネーシが日待にだけは呼ばれないという事実は注目すべきことである。理由は女は不浄であるからということである。

日待に出席する男の神役たちは全員この日は朝から仕事を休んでいる。ガチによばれてフロに入ったのち、自宅に再び帰り、そこで衣服をととのえる。神役は羽織袴の服装である。ホンボーイだけは袴をつける。それから六時

か六時半ごろに神役たちは総代宅に集まる。日没のときから神役たちはおつとめを始めなければならないということになっている。しかし実際はそれよりやや遅い刻限からはじまる。

六時半ごろから神役によって「おがみ」を行なう。床の間に線香および花米や餅のそなえものが置いてある。この床の間に向かって「おがみ」を行なうのである。御神体にあたるものは床の間に置かれていない。供物だけである。

「おがみ」の言葉は嚴格には決まっていない。まず昨年の礼を言うことからはじまる。「昨年は全体がケガがなくてありがとうございました。今年もよろしく」というようなことをいう。これはホンボーイがいう。お願いの一例をあげるとつぎのようなことをいう。

「私たちが神さまにむかうことにおいては、先代のままになにごとも大事にしていきますけれど、まだ若年でなんにもわからないもので、私が神さまに申しはずしがあつても、受けとりはずしのないようにお願いします。」とまず言い、それからつぎのようなさまさまなことをいう。「この敷島になにごともないように、国難も島難もないように」。「敷島のあまたあまたの武運長久をおねがいします」。「みなさん（ムラ人のこと）の高さ低さもないように」。このようなことを神役がおねがいする。これはあくまでも一例であつて、人により多少異なる。ホンボーイは毎年人が変わるから、極端な場合、人によっては床の間に向かい手を合わせるだけで済ませた場合もあつたという。

ただしおがむ内容に著しい特色がある。「三六五日間の島民の武運長久をおねがいする」のであるとムラ人が言っているが、つまり健康で人間関係がうまくいき、災害がないようにおねがいする。そこには農業生産、漁業生産

など、生産面に関する事柄が祈願としてまったく入っていないのである。

祭神は明確には意識されていない。あえて捜せば天照大神といえよう。後で述べるように、夜中になって書く札に天照大神の文字が入っているからである。日待講にこの天照大神を祭神に祀っている事例は他の地方でもしばしばみられる現象である。たとえば厳重な儀式をともなつて日待講を行なっていた滋賀県小椋村では、字所有の天照大神の掛図を祀り、御神酒をあげていたという。⁽²⁾しかし悪石島のムラ人の意識としては天照大神というよりも島立ての神さま（悪石島をつくり、とおい昔から島民を守つてくださったといふ神さま）にたいして祈っているようである。強く質問すればそのような答えがもどつてきた。とはいえ、いま述べたように明確な祭神を意識せずに祈っているというのが自然なようである。

床の間の供物について述べればつぎのとおりである。普通、床の間は狭いから、床の間の前のタタミに直接か、あるいは低い食卓などを置き、そこに供物を並べる。シキビの花を中央に置く。この花はどこの家の庭のものをとつてきてもよい。この花の両脇に「日の数餅」を置く。三六五個の小餅である。この両側の日の数餅のやや内側に御神酒が置かれる。中央のシキビの花の手前に洗米を一皿。洗米のすぐ両脇に「オブク飯」。両脇の御神酒の手前やや内側よりに花米を両脇一皿ずつ。洗米の手前に灯明。灯明の手前、最前列に「七枚餅」。この七枚餅は正式には「供物餅」とよばれる。その右に線香を置く。灯明と線香は「おがみ」を行う際にホンボーイによつて点火され、解散時まで点けられたままである。

この「おがみ」のときには一般のムラの人たちはまだ参加していない。たまたま招待者のうちではやく来た人が一緒に拝む程度である。しかしそれぞれのムラ人は、どの時刻にどのような行事が進行しているかは熟知している

ので、自分の出席するべき時刻を心得ていてその時刻に出席する。そのため、早く来すぎる招待者というのは慣行をよく知らない学校の先生が多いという。

この日待講に招かれる人たちは「招待人」および「相伴人」とよばれる。招待人は本来の島民でない人たち、学校の先生がそうであるし、電電公社の人たち、また、たまたまこの島に来た人たちが含まれる。相伴人は村議・青年団長などの役職者や前年の役職者たちである。そのためユーブハズレといって、六〇才を過ぎてユーブでなくなった人でも、前年度の役職者であったために招かれる場合もある。もともと現在は島民が少なくなったのでユーブハズレは六五才になっている。

「おがみ」が終わると神役たちに米粉をこねた黍をだす。この島ではこれをボタモチとよんでいる。さらにお茶とつけものがでる。これらをたまたま居合わせている人たちに出す場合もある。

ついで神役たちに「すいもの」がでる。これはサンゴン（三献か）という。左右がともに吸物で中央がサシミである。吸物とよばれているがいわゆる吸物ではない。右の方は餅一切れと魚が入っている。中央のサシミもそうだが魚の種類は問わない。左の方は豆腐にソーメン、シイタケなどが入っているものである。これらの内容は総代の裁量によって多少異なる。

最初に右の吸物から手をつけることになっている。この右の吸物を食べ終わったところを見はからって、ヒヤ酒と花ブシがでる。ヒヤ酒は燗をしていない酒の意でイモ焼酎である。花ブシはカツオブシの削ったものである。このヒヤ酒と花ブシを出すのをとくに「儀式」とよんでいる。

この「儀式」が終わると、ついで燗をした焼酎がでる。これはもう自由に飲んでよく、ガチなどが「さあ、どう

ぞ」といって神役などに進めてまわる。またガチ自身も飲む。

「すいもの」の膳がひかれると、かわって御飯の膳がでてくる。御飯以外に大根の酢のものの皿と魚・コンブ・サトイモ・トウフなどを煮こんだ皿、それに漬物がついている。この膳を出してもらえるのは五人の神役と新ユーブンだけである。新しくユーブンになった人がとりたてて膳を出してもらっている事実は注意すべきであらう。

昼食の食事の用意もそうであるが、この食事の用意、酒の用意など、台所方は一人の庖丁人と数人の釜元とでなされる。庖丁人は男性で釜元は女性である。これらの女性はザシキに入ってくることはない。飲食類をはこぶのはガチである。これは台所が忙しいので、女性が飲食物をはこべないのではなくて、ネーシ（巫女）が出席できないのと同様に女性の不浄を嫌うからだと解釈すべきであらう。

またこの膳は神役と新ユーブンに出されるといふ述べたが、年によって招待者・相伴人など広範囲の人たちに出される場合がある。出す範囲を決めるのは、この日待講の日に先だつ一月四日の初寄合の日に、どれだけの範囲の人に膳を出すかを話しあう。範囲を決定する規準は、昨年度の農作物の収穫高によって決定する。豊作だと広範囲の人に膳がならび凶作だと範囲がせままる。

夜の八時から九時ごろには食事が終わっているから、食事の終えたところを見はからって一般の人たちが集まってくる。一般の人たちといってもユーブンに限られている。全員で酒を飲み談合に興じる。

夜中の一一時ごろになるとお札を書く作業がはじまる。といっても、かなりの人たちが酒に酔っているので、酒の飲めない人や比較的正気の人たちがこれを請負うことになる。半紙を三〜四センチの幅に切って、つぎのような

二種類の札をつくる。文面をあげよう。「天照大日靈尊おほひるみ奉行神道行事運命延長動靜隨喜およろこ」および「蘇民生来子孫繁昌也」である。このお札はあとで各人にくばられる。また島を出ていった人でも、花米をだした人にはこの札がくばられる。年をとった親が、本土に住んでいる息子や娘の「武軍長久」すなわち病氣や交通事故がないようにという願いのために、その息子や娘の名前で花米をだす場合が少なくない。嫁にいった娘のも分けへだてなく出すという。つまり、本土で下宿している息子というような他出家族員だけではなく、すでに他の家族を形成している人の名もつらねてあるのである。

前者の「天照…」の方は各戸に一枚ずつ。嫁に出ている娘の場合は、別の家族をもっていることになるから、この「天照…」も一枚もらう。昭和五〇年現在、一〇〇枚ほど書いたという。もう一方の「蘇民…」の方は各人一人一枚である。二〇〇枚ほど書いたという。

夜中の一時ごろになると、全員で「夜中粥」を食べる。一般の人たちは明け方の三時ごろまでにはほとんど帰ってしまっている。神役は朝日が登るまで正座して待っていないなければならない。朝日がさすと、神役たちは床の間に向かって簡単にoganで、それから解散する。別に朝日に向かってoganすることはない。

以上が日待行事の行事内容である。ついで次節で行事の変化を記述する。

注(1) 薪木はとくにヒノトギとよばれている。

(2) 守随「部落と講」、柳田国男編『山村生活の研究』一九三八年（一九七五年国書刊行会復刻、八七頁）。

四 日待行事の変化

前節では日待行事の内容について述べた。ここでは生活の変化と関わらせて日待行事の変化をながめてみたい。まず日待講参加者の資格と属性について考えてみる。参加資格はユーブニンとなっている。悪石島が含まれている十島村に属す島々および鹿児島本土に近い三島村に属す島々では一五才から五九才までの壮丁をユーブ（ニン）とよぶ。ユーブニンは、はしけ作業などの舟付場での作業、農道などの道路工事、また屋根の葺き替えなど共同労働には出役の義務をもつ。六〇才になるとユーブハズレといって、これらの義務から解放される。ユーブニンはこれらの労役の義務をもつが、また逆に「一人前」の労働の単位として評価される。

このようにユーブニンは一五才から五九才までの壮丁であるから女性が含まれない。これが原則である。ところが、悪石島ではユーブニンに女性も含まれている。これは女ユーブニンとよばれ、日待講にも参加している。しかしながら推測するに、日待講への参加は近來になつての変更とおもわれる。なぜなら、前節の行事内容のところで紹介したように女性是不浄として嫌われているからである。この島の信仰行事にとって不可欠のネーシ（巫女）さえも参加を拒否され、「送り膳」を受けとるだけである。

女性が日待講に参加するようになったのは、女性もユーブニンとみなされるようになったのを契機としていると考えてよからう。女性がユーブニンとみなされたのは労働力の不足を原因としていよう。昭和二八年の文献では男女を区別した上ではあるが、ユーブ人数に女性を加えている。

しかし、女性がユーブニンに含まれるようになったとはいえ、あくまでも女ユーブニンであつて、ニュアンスと

しては一人前とは認められていないようである。たんにユーブニンと言うとき、男性だけを指している場合がしばしばある。たとえば昭和三三年四月改『悪石島部落会々議事項記録』につきのような記載がある。「部落総会は必ず有夫人は全員出席の事。女家主も同様とす」。このような文意の場合、ユーブニンに女性が含まれていないようである。女家主とは家族構成員に成人男性が含まれていない家族の世帯主を指す。すなわち、部落総会にはユーブニン全員が出席すべきこと。ただしユーブニンがいない家族は世帯主である女性が出席すべきことという意味である。ここではユーブニンはもともとの意味である壮丁をさしている。

また、日待講への参加資格が家族単位ではなくユーブニン単位であることを大きな特色としてあげることができる。これはたいへん重要な特色である。なぜかという点、社会生活のさまざまな側面において、家族よりもユーブニン（個人）を単位にしているのがみられ、その反映とおもわれるからである。ユーブニン単位であるということは、見方を変えればムラ単位であると言える。つまり実際の場においては、ムラのユーブニン全員が一丸となって働く場が多く、家族単位として働く場が少ないということであるからである。

たいへん大まかな変化の過程を述べれば、労働はこのムラ単位あるいはユーブニン単位から、家族単位へ移行している。もっとも、文献資料や聞き取りで遡り得るまでの過去に遡ってみても、純粹にムラ単位あるいはユーブニン単位で家族単位がなかった時代を実証できない。労働はつねに家族単位のものも含まれている。想像を非常にたくましくして、遠い過去にムラ単位の労働だけがあり、家族単位の労働はなかったかもしれないと推測しても、この推測はあまり積極的意味をもたないし、おそらく誤っているだろう。なぜなら、土地所有制度がそのようなありかたを許さないからである。この稿では詳しく述べる余裕をもたないが、この悪石島をも含めて、トカラ列

島のすべての島でみられたいわゆる土地総有（共有）制度はムラの内部組織の高度な発展が前提とされる。ムラの組織が一定程度の高さに発展するまでは、土地の所有（使用）は最初の鋤入れ者が最優先権をもったであろう。それは当然、家族、あるいはそれに類似した集団によつて耕されたであろう。また、土地総有制が確立した時点では、それに並行して必ず、家庭菜園程度かあるいはそれ以上の私有（家族有）地が存在している。⁽²⁾

だから家族単位の労働はつねに一貫して存在しつづけたといった方がおそらく正しいであろう。しかし程度の問題は貴重であつて、たしかにムラすなわちユーブニン単位が優先され、家族単位の労働は二次的であつた時期が過去にかなり長くあつたことは事実である。この島においても、漁業・農業の主要な対象であつたカツオ漁、焼畑耕作のかなりの部分はユーブニン単位であつたといえる。

いま述べた事実は、日待講における物品の供出のあり方に反映している。なぜなら、このようなものは収入のあり方を反映するからである。ユーブニン単位の労働が多い場合は、たとえばユーブニンが五人いる家族とユーブニンが一人しかいない家族では、原則として五対一という収入の差がある。当然、ユーブニンが五人いる家族の方は五倍の供出をしなければならないという発想になるからである。だから家族単位の収入が多くなると、家族単位の供出が要求される。とはいへ、これはあくまでも原則として、あるいは基本的な発想としてそうであると指摘しているにすぎない。現実の供出にはこれ以外のさまざまな要素が入り込む。

具体的にながめてみよう。焼酎の供出について述べる。焼酎は各戸ごとに一杯ずつとユーブニンごとに一杯ずつとつている。前節の供出内容の紹介のところでふれたとおりである。古老に聞くと、この供出方法を古老の知るかぎりの昔からとつていたという。

表 1 家族別焼酎供出量（昭和28年）

世帯主	男 家族員数	女 別 家族員数	ユープニン (男)	焼酎 供出量 (杯)	世帯主	男 家族員数	女 別 家族員数	ユープニン (男)	焼酎 供出量 (杯)
肥後政治郎	男5	女3	2	3	有川 吉則	男2	女3	1	2
有川 清彦	男3	女4	2	3	宮永 勝彦	男7	女2	3	4
有川 広美	男2	女5	1	2	坂元 厳	男2	女4	1	2
有川 政雄	男3	女4	2	3	宮永 広	男3	女4	1	2
有川 義次	男4	女3	2	3	坂元 貞義	男2	女3	1	2
有川 泰助	男6	女1	3	4	渡山 恵信	男3	女5	1	2
有川 一嘉	男2	女3	1	2	有川 清	男3	女2	1	2
有川 安彦	男3	女2	3	4	肥後 政義	男3	女2	1	2
東条 行雄	男2	女2	1	2	坂元 勇	男1	女1	1	2
有川 忠市	男4	女2	2	3	中村いせぎく	男0	女1	0	0
有川 政一	男6	女2	1	2	中村よしつな	男0	女4	0	0
有川 義一	男4	女3	3	4	中村 すえ	男0	女4	0	0
有川 秀雄	男5	女3	1	2	肥後 よし	男1	女3	0	1
鎌田 政成	男3	女2	1	2	比地岡栄雄	男3	女3	1	0
西 茂男	男3	女2	1	2	竹田 ます	男0	女1	0	0
宮永 由美	男6	女5	4	5					
有川 貞雄	男2	女4	1	2	計	185		43	69

表1は昭和二八の焼酎供出量を各家族別に表わしたものである。この表によると、ユープニン（男）の数に各家族の義務の一杯を加えた数が各戸から徴集されている。たとえば肥後政治郎は男五人、女二人あわせて七人家族であり、ユープニンが二人いる。そのため三杯の焼酎を徴集されている。この原則が各家族に適用されているようである。

ただし表の下位の方に目をうつすと、中村いせぎくなど、すでに家族の構成員の中に男性がない家族は一杯を供出する家族単位の義務からはずされている。また比地岡栄雄はユープニンであるにもかかわらず、供出義務からはずされているのは学校の先生であるからであると推察される。

この伝統的な焼酎の供出方法が昭和二八年を最後に大きく変更が加えられる。昭和二九年の

「村中御祈願之為各戸より家毎諸品取集記載簿」につきの記述がある。「焼酒各戸毎より有夫各家より出すのを本年は全然製造なき為め部落用二升求めて済ます」。すなわち、各戸で焼酎を全然つくらなくなったために、従来の供出方法を変更して、焼酎を二升買い求めたとある。

この大幅な変更の原因として二つ想定できる。一つは悪石島の所属する地域の政治的統治主体の変更によるものである。すなわち、この一年前に米国占領軍々政下から日本政府に所属が変更され、ために法的にみて、各戸自由に酒を製造しにくくなった。第二に昭和二年は作物が不作であったようである。そのために、サツマイモは主食だけにまわされ焼酎をつくる余裕がなかったらしい。この年に不作であったのは、のちにみる表2や表3にもあらわれている。

昭和三〇年以降、また焼酎の供出が復活するが、昭和二八年までのようないわば「整然」とした供出方法は姿を消す。たとえば昭和三三年でみると、「焼酎はなきため各戸有台の家より御神酒として寄附していただくことにす」とあり、具体的にはカンビンとか二五度の焼酎とか三〇度の焼酎が五合あるいは二合というように寄附されている。カンビンはもちろんだが焼酎にアルコール度が示されているのは市販のものである事実を示している。つまり各戸が購入して、もちあわせているものを寄せ集めるようになったのである。寄附量にはとくに規準はなくなった。

つぎに米と粟の供出の変化について述べる。表2は昭和二八年から昭和五〇年までの米と粟(麦)についての供出の変化を示している。米とか粟(麦)は住民の主食でもあるので、この表はおのずから住民の主食の変化を示している。

聞き取りによると、島が日本に返還された数年後ころから食事内容が大きく変わったという。返還された数年後

表2 米粟供出の年次別変化

	米	粟	資料に記載されているただし書 () 内は筆者の注記
昭和28年	5 勺	1 合	
昭和29年	5 勺	5 勺	本年は例年より減し
昭和30年	5 勺	粟麦 5 勺	
昭和31年	5 勺	粟麦 5 勺	〇〇（人名）米なきため麦3合
昭和32年	0	0	取立て止め部落救助米を使用
昭和33年	5 勺	5 勺	粟なきため押麦
昭和34年	5 勺	5 勺	
昭和35年	5 勺	粟麦外米5勺	
昭和36年	5 勺	押麦 5 勺	（粟を集めると記載して実際の取立は押麦）
昭和37年	5 勺	押麦 5 勺	
昭和38年	5 勺	押麦 5 勺	
昭和39年	5 勺	麦 5 勺	
昭和40年	5 勺	麦 5 勺	
昭和41年	5 勺	0	{本年度は改正により各戸より人口一人につき白米5勺取集める事にする
昭和42年	5 勺	0	
昭和43年	5 勺	0	
昭和44年	—	—	（資料欠）
昭和45年	5 勺	0	
昭和46年	5 勺	0	
昭和47年	5 勺	0	
昭和48年	5 勺	0	
昭和49年	5 勺	0	
昭和50年	5 勺	0	

（注1） 資料は各年度の「村中御祈願為各戸より家毎諸品取集記載簿」を使用。

（注2） これらは「人口一人より」とる量である。幼児もユーブハズレのものもとられる。

（注3） 粟の欄に「麦」などと記入したところがある。これは麦が供出されたことを示している。たとえば昭和30年の資料はつぎのように記載されている。「各戸人口一人より米粟取立 米は5勺 粟麦5勺宛」

ほととえば、
 昭和三〇年ごろ
 であらうか。こ
 のころはまた、
 別の稿で詳しく
 述べるが、粟の
 栽培のほぼ終焉
 するころであつ
 た。このころか
 ら農業にたいし
 ての依存度がや
 や減じてきた。
 そのため、山深
 くわけ入って山
 の斜面を焼いて
 粟を栽培する労
 多くして益少な

い農法がまったく見捨てられたのである。

なぜ農業にたいしての依存度が減じてきたかという点、そろそろ農業以外の現金収入の道ができはじめたからである。出嫁ぎとか、林業や漁業による生産物の商品化が一部にはみられるが、現金収入の道をひらいたもつとも大きな要因は離島振興法の制定である。離島における産業の振興を目的として、昭和二八年七月に離島振興法が制定される。同年一〇月に悪石島を含む十島村の島々が離島振興対策実施地域に指定された。当時の離島振興法の目的は産業の振興であるから、この法律にもとづき産業が振興し、現金収入の道がひらけてきたと一見考えられる。その事実がまったくないとはいえないけれども、しかし実際は離島振興法にもとづく国庫補助による港湾や農道の整備が、日傭労働による住民の現金収入をもたらした事実の方がはるかに大きい。

食事内容が大きく変わる昭和三〇年前後以前の食事内容は、聞取りによると主食は粟とサツマイモであったという。戦後になると水田が少しずつ増えはじめたが、まだ米が日常の主食の王座を占めるわけにはいかなかった。表2の昭和二八年のところを見ると、ムラ人一人にたいしそれぞれ米五勺、粟一合をとっている。三人家族だと米一合五勺、粟三合とられる勘定になる。焼酎と異なり、家族単位の供出義務はない。米より粟の方が供出量が多いのはこの時期の生産量からみて当然であろう。少ないとはいえず、この島では乏しい米が五勺もとられているのは、この行事が祭事であることを考慮に入れなければならない。この年、サツマイモも供出されているが、サツマイモは形態上、量をはかることがむづかしく、各戸の供出量は記載されていない。

この昭和二八年時点で各人から米を五勺供出させているが、時代を遡ると米の供出義務はなかったと推測される。この島は昭和に入るまで、藁をとる目的の陸稻の栽培は別として、水田耕作は不可能であった。同様に水田耕作が

不可能であつた隣接の島々における祭事の時の供出内容に米が含まれていなかったから、この推測はほぼ正しいとおもわれる。文献資料がなく、たんなる聞取りによるだけであるが、米のとれなかつた島々では、時代が廻れば廻るほど、祭事において、米よりも里芋が重視されている。

昭和二八年では供出量において米より粟が多い。それ以前の時代でも同様に粟が多かつたであらう。それが昭和二九年には米と粟の供出量が等しくなる。この米五勺粟五勺という形態は昭和四〇年まで持続する。

昭和二九年に供出量に変更を加えた原因はさきほども述べたように不作が原因とおもわれる。前節でもふれておいたが、不作の年には食事内容を縮少したという聞取りを得ている。この縮少は表4にもでてゐる。表4をみると、昭和二九年の購入物件が一番少ない。醤油、ソーメン、焼酎、石油の四点にすぎない。

表2をみると、昭和三〇年から昭和三五年ごろにかけて、粟の供出がなくなり、順次、麦に変化していつてゐる様子がみてとれる。これは重要な変化である。少なくとも近世・近代を通じて、農業の主要な生産対象であつた粟栽培が完全に廃止されていった事実を示している。かわつて麦が供出の対象になるが、これは常畑だけで栽培される。

ところが昭和四一年に今度はこの麦の供出も廃止される。なぜであらうか。近い過去であるのでこの原因は明確に分かつてゐる。このころから各戸で大島紬の紬織をはじめたために畑地を見捨てたのである。ためにこの島では麦はいうにおよばず、サツマイモの収穫が激減したのである。

はじめ紬織は奄美大島から嫁に來た数人が細々と織つていた。その事実を調査した鹿児島県産業企画部門と村当局は紬織を鼓舞することによってこの島の産業振興をはかるとともに現金収入の道もひらけると判断した。それが昭和三九年のことである。県の補助で公民館に一〇台の織機が設置された。昭和四〇年に六カ月の講習会がひ

表3 年次別供出物品

物 品 名 年 次	薪	竹	大 根	里 ジャ イガ イモ モ	ト ウ フ	コン ブな ど	肴 切 れ	ウ ソ ド メ ン
昭和28年	○	○	○	○	○	○	○	×
昭和29年	○	○	○	○	○	○	○	×
昭和30年	○	○	○	○	○	○	○	×
昭和31年	○	○	○	○	○	○	○	×
昭和32年	○	○	○	○	○	○	○	○
昭和33年	○	○	○	○	○	○	○	○
昭和34年	○	○	○	○	○	○	○	○
昭和35年	○	○	○	○	○	×	○	○
昭和36年	○	○	○	○	×	○	×	○
昭和37年	○	○	○	○	×	○	×	○
昭和38年	○	○	○	○	×	○	×	○
昭和39年	○	○	○	○	×	○	○	○
昭和40年	○	○	○	○	×	○	○	○
昭和41年	○	○	○	○	×	×	×	×
昭和42年	×	○	○	○	×	○	×	×
昭和43年	○	○	○	○	×	×	×	×
昭和44年	—	—	—	—	—	—	—	—
昭和45年	○	○	○	○	×	○	○	×
昭和46年	○	○	○	○	×	○	○	×
昭和47年	○	○	○	○	×	○	×	×
昭和48年	×	×	○	○	×	○	×	×
昭和49年	×	×	○	○	×	○	×	×
昭和50年	×	×	○	○	×	○	×	×

られた。それから一〇年後の昭和五〇年現在、極端な高齢者を除いたこの島の主婦一七人のうち一人が紬を織っている。紬織の普及計画はまずは成功したといえよう。

昭和五〇年現在、一反あたりの織賃は三万円あたりと聞く。ベテランで一日に三尺から四尺、経験の乏しい人で一日に一尺五寸ほど織るといふ。そうすると、普通の人で一カ月の現金収入は六、七万円ぐらいにはなろうか。この年の日雇賃金は

購入物品

ロセ イン ソコ クウ	魚 ・ 雑 魚	味 の 素	(そ の 他)
×	×	×	
×	×	×	
×	×	×	(カツオブシ)
×	×	×	(カツオブシ)
×	×	×	
×	×	×	(モチ米)
×	×	×	(モチ米)
×	×	×	
×	○	×	
×	○	×	(トウフ)
×	×	×	(トウフ)
×	○	×	
×	○	×	
×	○	×	
×	○	×	(コンブ)
×	○	×	
一	一	一	
×	○	×	
×	○	×	(コンブ 電池)
○	×	○	(タマゴ シイタケ 花カツオ 電池 タクアン)
○	○	○	
○	○	○	(シイタケ 塩 ママレモン)
○	○	○	(シイタケ 塩 ママレモン カタクリ粉 モチ米)

一日二八〇〇円であるから、日雇の一カ月の労働日数を二〇日とみなすと、紬織は日雇よりやや収入が良いという程度か。

紬織の振興はそれ自体結構なことであるけれども、そのことにより農業は大きな打撃をうけた。主婦の労働が大きく紬織にうばわれただけでなく、主婦が片手間に農業を手伝うことさえもむづかしくなった。なぜかという

と、紬を織る場合、織

表 4 年 次 別

物 品 名 年 次	カン ヅメ	ナ タネ 油	木 レン タン 炭	塩 サ バ	大 豆	石 プロ パン ガス 油	焼 酎	紙・ 筆な ど	ウ メン ・小 麦粉	茶	砂 糖	し よう ゆ
昭和28年	×	×	×	×	×	○	○	×	○	○	×	○
昭和29年	×	×	×	×	×	○	○	×	○	×	×	○
昭和30年	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○
昭和31年	×	○	×	×	×	○	×	○	○	○	×	○
昭和32年	×	×	×	×	×	×	○	×	○	○	○	○
昭和33年	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○
昭和34年	×	×	×	○	×	○	×	○	○	○	○	○
昭和35年	×	×	×	○	×	○	×	○	○	○	○	○
昭和36年	×	○	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○
昭和37年	○	○	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○
昭和38年	○	○	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○
昭和39年	○	○	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○
昭和40年	○	○	×	×	×	○	×	×	×	○	○	○
昭和41年	×	○	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○
昭和42年	○	×	○	○	×	×	×	○	○	×	×	×
昭和43年	×	○	○	○	×	×	×	×	○	○	○	○
昭和44年	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
昭和45年	×	×	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○
昭和46年	×	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○
昭和47年	×	○	○	○	×	○	×	○	○	○	○	○
昭和48年	×	○	○	○	×	○	×	○	○	○	○	○
昭和49年	×	○	○	○	○	×	×	○	○	○	○	○
昭和50年	×	○	○	×	○	×	×	○	○	○	○	○

子の手が荒れていると、細い糸がひっかかり織るのを困難にするのである。そのため、手の荒れる農業はなるべくひかえなければならぬ。そこで水田に比べ収益率の低い畑がまず見捨てられたのである。

表2の昭和四一年以降、麦の供出がなくなつたのは畑地が見捨てられた事実を示している。

表3は焼酎・米・粟(麦)を除いた供出物の年次別変化を示している。大根・里芋・コン

ブの三点がほぼコンスタントに供出されている。薪木と竹が昭和四八年に中止になった。表3をみて、たいへん大まかに言えば、昭和三五年ごろから×印、すなわち各戸からの供出を求めないものがではじめる。この事実は表4と比較してはじめて意味をもつ。

表4は日待講を行なうにあたって買求めた品物を年次別にみたものである。○印がその年次に買求めたことを示している。昭和五〇年に近づけば近づくほど買求める品物が多くなる。コンスタントに購入しているものを除くと、大まかに言って、やはり昭和三五年ごろから買求める品物が増えはじめる傾向をもつ。

表3は各戸から取集めた品物、表4は買求めた品物を示しているから、表3と表4の品物の増減は原則として表裏の関係になる。すなわちこの二つの表から、昭和三五年ごろから、行事に必要な物品の地元調達が減りはじめ、かわって物品の購入が増えはじめた事実が推察される。つまり、このころから現金が活発に動きはじめたのである。

昭和三五年といえば、全国的レベルでいうと、経済の高度成長のはじまりの時期である。悪石島に限らず、十島村でもさまざまな土木工事が増えはじめる時期である。たとえば昭和三八年に悪石島だけでみて、二九〇万円の事業費・国費が投入されている。⁽³⁾

以上、かぎられた側面からだけではあるが、日待行事の変化を追うことを通じて、生活の変化をながめてみた。

注(1) 「村中御祈願之為各戸より家諸品取集記載簿」。

(2) 拙稿「焼畑村落の土地制度と村落構造」(『民俗学評論』第七号、一九七二)を参照していただきたい。

(3) 『離島振興20年の歩み』日本離島センター一九七四、一一〇頁。

五 おわりに

日待講を通じてムラの生活と社会構造を理解しようとした。あくまでも、日待講という行事を通じてのムラの生活と社会構造の理解であるから、ムラの生活や社会構造にたいしての、たいへん限られた視点からの照射にすぎない。

行事を通じて生活や社会構造を把握する方法は限られた視点からの照射という欠点をもつけれども、また逆にかなり具体的な貌をとって、それらの実体や変化をあらわす長所をもっているようにおもえる。

この長所をどれだけ生かしきれたか心許ない。この稿は継続する「ノート」の一部にすぎないので、早急な結論はさしひかえるが、この地域の社会構造を理解するうえで非常に重要なユーブニンについてだけさらに少しふれておきたい。

日待講の構成員はユーブニン（「有夫人」と書かれるのが普通である。夫役の義務を有する人と解するのが妥当か）である。ユーブニンが集団の構成単位になっているのは日待講に限らない。ムラ寄合などいわばフォーマルなムラを単位とした集団はユーブニンを構成単位とするのが普通である。日待講の場合もその反映である。それゆえ、家族員の中に複数のユーブニンがいれば、この複数のユーブニンが出席することになる。

この悪石島では政治・経済的な事柄を決定・伝達する「村寄合」と比較的親睦色の強い日待講などの寄合は区別され別の集団として存在する。前者の「村寄合」の場合、構成単位はやはりユーブニンであるが、前節でふれたように「女家主」も出席の義務をもつ。ユーブニンでないものが出席の義務をもつのは前者の「村寄合」が家族単位

でのユニットを重視しているからであろう。すなわち、すでに政治・経済的な決定や伝達は家族という単位を無視できなくなっているのであろう。

それになりたいし、日待講の場合はどうなっていたであらうか。やはりユーブニン単位であるが、これに女ユーブニンが加わりはじめた。現在、悪石島ではユーブニンと言えば女性も含まれた意味になっている。これは既述したごとく労働力の不足が原因となっているのであろう。この事実が日待講に反映しているようである。すなわち日待講においては、「村寄合」のようにユーブニンに女家主が加わるという形態をとらずに、女ユーブニンが加わるという形態をとっている。

三節で述べたように、五人の神役と並んで新ユーブニンにも膳が出されている。これはどう解決すべきであらうか。現在ではムラ人はこの事実についてとくに関心を示していない。しかしこれは一五才になったものを「一人前」として、つまりユーブニンとして迎え入れる儀礼でもあったと解釈するのが自然であらう。ところでユーブニンになる一五才という年齢資格は、まったく死文化してしまっている。一五才になってもユーブニンにならないのが現状である。この年齢のときには学校に在学しているためである。また昭和三〇年代からとりわけ顕著になった現象であるが、島の中学校を卒業すると、ほぼ全員が就職や進学のために島を出ていってしまうことになった。そのため、新ユーブニンがほんの数人であったり、最近のようにまったくないという年が続出するようになった。行事雑務の受持の変化については述べることを省略したが、新ユーブニンの数が極端に少ないため、本来は新ユーブニンがしなければならぬ雑務のいくつかをムラ内の班を利用して、班の構成員が年ごとに順ぐりに受けもっているのが現状である。このようないくつかの事実が重なって、新ユーブニンを迎え入れる儀礼は形式的にだけ残存し

ているのではないかとおもわれる。(1)

いずれにしろ、三節・四節に述べた諸事実から明らかなように、この島の生活ではユーブニンという個人の単位が家族のユニットよりも重視されていたようである。それは生産労働の反映であることはいうまでもない。

となれば、生産にかかわる制度や組織がどうなっていたのか、また現状はどうであるのか。さらに神役がでてきたが、それらに信仰はどのような意味をもつて関わっているのか、等々が明らかにされなければならないだろう。これらは意図的に述べるのを控えた。稿を新らたにして述べる予定である。

注(1)

ここで形式的にだけというのは迎え入れる儀礼が簡素化されたという意味ではない。迎え入れる意識が弱くなったという意味である。儀礼そのものはもともと簡素なものであったろう。なぜかといえば、ユーブニンを迎え入れる儀式は「初寄合」の方の受け持ちであつて、日待講は迎え入れることにおいては付随的な役目しかもたなかったと想像するからである。

